人と人から国と国へ

W校 高等部二年

武田勇人

僕はこの夏、日本に一時帰国した際、南三陸、仙台で行われた日韓高校生交流キャンプに参加した。僕は世界の国々の中でも特に、日本に関わりが深い国、韓国に興味を持っていたし、また東日本大震災から五年たった被災地がどう復興しているのかを自分の目で確認したく、このキャンプに参加することを決めた。

参加者全員が見知らぬ者同士の中、日本人の参加者たちとはすぐ仲良くなれた。ホテルに着くこと三十分、韓国人の参加者と対面した。最初はお互い緊張していたがお菓子を交換したりしてすぐに仲を深めることができた。

その後、実際に被災した地域を見に行った。しかし、そこには僕が想像した光景はなかった。まだ町の標高を上げるための盛り土が行われて

いる最中であり、完全に復興したといえる状況ではなかった。僕は犠牲者の追悼と南三陸のいち早い復興を願って黙とうを捧げた。そして、地元の漁師さん達と船に乗りホタテやホヤの養殖の現場を見学した。三陸の海の採れたてのホタテはほっぺたが落ちるほどおいしかった。その後、僕たちは地元の祭りを手伝ったりして南三陸の復興事業のアイデアを練っていった。このキャンプの一番のイベントである事業発表会はそれぞれのグループが南三陸についての事業を考え発表するというものだった。

僕たちのグループの事業計画は南三陸の物産展を東京や大阪などの大都市で行い、南三陸を知ってもらい、南三陸に来てもらうというものだった。ここまではすんなり決まったもののプレゼンテーションの準備をするうちにグループ内の日本人と韓国人の間で知らぬ間に意見の食い違いが生じてしまったり、たくさん困難にぶ

つかった。その結果、発表会当日の朝五時になるまでプレゼンテーションは完成しなかった。

そして発表会、僕たちは十分に準備ができてはいなかったものの精一杯、自分たちが考えた事業に関するプレゼンを行うことができた。結果は八グループ中二位の優秀賞。その時の僕らのやり切ったという気持ちは言葉では表せないものだった。それはこの先、一生忘れることはないだろう。その後は縁日やバーベキューをしたり松島に行ったりして最高の時間を過ごすことができた。最後の夜にはグループの日本と韓国の男子全員で日本の一発芸をして盛り上がった。

次の日、ついに別れがやってきた。僕らが過ごした時間はたった六日間だったが、もう離れ離れになると思うと目の下が熱くなった。しかし涙は流さなかった。またの再会を約束していたから。

僕はこのキャンプで二つのことを学んだ。一つ目は信用できるのは自分の目だけだということだ。震災から五年が経ち、メディアも被災地を取り上げることは以前より減った。だから僕も心の中で完全に復興が完了していると思っていた。しかし、現実は違った。実際に現地に赴き、自分の目で確かめることの大切さを知った。

また、僕はこのキャンプに参加する前は韓国に対していい印象を持ってはいなかった。インターネットで韓国について多くの悪い情報が書かれていて、その情報を鵜呑みにしていたからだ。しかし、このキャンプに参加してそのように感じることは全くなく韓国の高校生は皆、親切だった。僕は百聞は一見に如かずの意味を身をもって理解した。様々な情報が氾濫している今、常に問題意識をもって情報を選択し掘り下げていく力を養っていくことが重要なのだということにも気づいた。同時にインターネットの情報に惑わされていた自分を恥ずかしく感じた。

二つ目は一生の友達ができたということだ。僕のグループのメンバーはニューヨーク、東京、岩手、兵庫、大阪、ソウル、城南と様々な場所から集まった。この仲間と六日間で得た経験はこの先を生きていくうえで大きな自信になるだろう。そしてこのメンバーともキャンプ以降も交流を続けていくだろう。

今、日本と韓国の関係は決して良好とは言えない。しかしこの先、両国が発展していくには良好な関係を作っていかなければならないのは明らかだ。僕はこういった日韓交流の機会を増やすべきだと思う。インターネットやメディアの情報だけが真実だと思うのではなく、実際に交流をして相互理解を深めれば、人と人の関係から国と国の関係も良い方向へ進むのではないか。

政治と社会と自分と

L工校　高等部　一年一組
平形　将都

君は、誰を選ぶ？トランプが？それともクリントンか？

最近、世間で話題になっているのが、アメリカの大統領選挙である。イギリスのヨーロッパ連合離脱や、タイのプミポン国王の死去などといった波乱に満ちたこの時代であってでも、特に注目を集める大統領選挙。投票日まであと一か月もない今、論戦はヒートアップする一方だ。

まあ、自分には関係ないか、未成年だし、とか言うが、実際冗談では済まされないのが、今の現実である。トランプ氏が掲げる様々な「政策」はアメリカを経済的に破綻させ、味方の外国を遠ざけ、新たな問題を作りうる可能性がとても大きい

と分析されている。おまけに、過激な発言を繰り返すトランプは、大統領になる資格はないに等しい。

　かと言って、クリントン元国務長官が大統領になればすべてが解決するわけではない。クリントンもクリントンで、色々な問題を抱えている。国家機密などを収めたメールを私的な電子メールアカウントで扱っていただけでなく、過去に様々な問題を起こしている。トランプと比較すると慈愛にあふれた聖人に見えなくもないが、両者の全貌を見なければならない。

　物事のすべてを見る。それが、自分たち国民の責任ではないのであろうか。教科書のようにありふれた言葉だが、有権者でもない、未成年の自分たちでも、政治とそれに伴う社会について学ぶ義務がある。だから、学校で社会という授業があるのだ。だが、授業だけでなく、幅広く関心を持ち、常に自分の考えを見出さなければいけない。

そうしないと、私は流れに、飲み込まれてしまいそうな気がする。

私にとって、自由に考えられるという事は、何よりも大事という事でも過言ではない。頭の中では、誰にも邪魔されない。だけど、頭の中が空っぽだと、ほかの者の考えに染まってしまう。英語には「Trend」と言う言葉がある。トレンドは、時代の趨勢、潮流、または流行のことであり、第一に思い浮かぶのがファッション等であろう。こういったトレンドに飲み込まれるか、逆に自分から飛び込んでいく者は少なくない。

だが、政治と社会も、そうだ。多くの者がそうであると考えれば、人は自然とそれが正しいと思えてしまう。思考の浸食である。

トランプが約束するメキシコとの国境に作る壁などに魅力を感じ、周りに感化され、ほかの意見を否定し、ただひたすら馬鹿正直に自分を信じ、トランプを信じ、心酔された者

クリントンが見せる智謀と戦略に魅せられ

何処までもついていくと熱弁し、自分を、世界を救ってくれると迷いなく確信し、間違いなどあるはずがないと断言してしまう者。

そのような者には、絶対になりたくない。

だけど、ただ見過ごすわけにもいけない。たとえ弾圧されても、見下されても、自分の信念を通し、何かを変えようとする意志を、私は尊敬する。

今年の大統領選挙で、大統領候補はトランプとクリントンの二人だけではない。共和党と民主党のどちらにも属さない大統領候補は百を超える。共和党か民主党でなければ当選は絶望的であるのに、それでもアメリカを変えようと立ち上がり、立候補した者は、百を超える。だが、彼らの名すら知らない有権者は多いだろう。

有権者でない、成人してもいない自分たちに何ができるのか。それは、「見る」ことだ。だが、一見だけで関係ないなどと片づけることなく、この大統領選挙の、この国の、そし



てこの世界の全貌を見て、考えていくことができる国民、そして人間に、自分たちはならなくてはならない。

いつか伝えたい

中等部一年二組　那須咲代

真夏の広島。私が平和記念資料館で見た物は、地獄だった。一瞬で消えた三歳の男の子の三輪車。それは焼けてさび、灰色と茶色になっていた。私は、その幼い子の事を思うと心が痛くなって、泣きそうになった。肌が溶け、どんどん流れている人の姿。その焼けた肌は腕からたれ下がって、まるで生き返ってきたゾンビのように見えた。そんなゾンビが目に入って来た瞬間、私はあまりにも恐ろしくて、体がひるんでしまった。そして、被爆者の黒い爪。それは、血管が変形して爪の中を通って黒くなったものだった。その爪は伸びると割れ、出血した。そんな爪を生きている人間が持っていたなんて、私には想像出来ない事だった。私は、原爆投下という残虐行為によって悲惨な姿になった人々の状況を目の当たりにして、人間は時として本当に非人

道的な事が出来るものだと強い怒りと恐怖心を感じた。原爆は、多数の命を奪っただけでなく、人の体を変形し、病気をもたらし、土地も完全に破壊してしまった。でも、落とした側には、消え去った人間の顔は全く見えていなかった。

私は幼い頃から、戦時中小学生だった日本の祖父に戦争の話を聞いていた。だから、私は食事をする時、戦時中疎開先でひもじい思いをした祖父の話を思い出す。祖父は学校から田舎に集団疎開していた時、食糧が少なく、皆で植物の根などを食べていたそうだ。

「『ごちそう』の梅干しを見ると、『おいしそうだ』と思って、まずご飯を一膳食べた気になる。そして、梅干しとご飯を一口食べ、ご飯二膳目と梅干しを食べた気になる。それから、ご飯をもう一口食べ、『おいしかった』とご飯三膳目を食べた気になる。梅干し一個とご飯二口だけで、ご飯三膳食べたつもりになるようにしていたんだよ。」

と祖父は言った。祖父は、一緒に疎開した同級生がお腹が空き過ぎて、毒だと知っていたのに青梅の種を食べてしまい、死んでしまったと話してくれた。そんな祖父の言葉から、「戦時中の日本人の苦しい思い」というものが、私の中にいつも存在するようになった。

私は、現地校の七年生の世界史の授業で、第二次世界大戦について勉強した。ドイツが降伏してからも、日本は戦いをやめる気配がなく、昭和二十年夏までに、すでに何万人ものアメリカ人や日本人が死んでいた。だから、「戦争を終わらせるために原爆が落とされた」と私は教わった。この時、私の中で「もしかしたら、原爆は必要だったのかもしれない」という疑問が生まれた。私は「無論、原爆、核兵器を安易に使ってはいけないが、もし再び太平洋戦争のように多くの犠牲を払う戦いが権力者のためだけに続けられていたら、平和をもたらすために核兵器を使うべきだと言える時があるのではないか」と思い始めた。

私の中で、アメリカの原爆投下は複雑なものになった。私は、アメリカで生まれ育ち、父はインド人で母は日本人だ。そして、私は幼い頃からフレンチ・アメリカン・スクールという仏語、英語のバイリンガル校に通っている。いつも多文化の中に生きている私は、どう考えるべきか自分でもわからなくなった。私がトルーマン大統領だったら、絶対に原爆投下を決断しなかっただろうとは、胸を張って断言出来ない。

そんな気持ちの中訪れた広島平和記念資料館で、私は平和を願う人々のたくさんの思いを目にした。広島を訪れた人々が折った鶴で作ったピース・サインや「平和」の文字。遠くで被爆した禎子が希望を失わず、死ぬまで折り続けた鶴。オバマ大統領が広島訪問の際に贈った鶴。そして、資料館出口前に置かれたノートには、日本語、英語、中国語、アラビア語、仏語、スペイン語、イタリア語など数多くの言語で書かれた平和へのメッセージがあった。私は三つの言語で書かれたコメン

トしか読めなかったが「もう二度とこのような事が起こってはいけない」「平和な未来を作ろう」「もう戦争はなくなってほしい」など平和への願いや核廃絶を訴えるメッセージに心を動かされた。そんなノートが何十箱もあるのだと聞き、私は胸が熱くなった。

「あなたは、核保有国アメリカ、フランス、インドと、被爆国日本の全ての文化の中でいつも生きているけれど、平和について自分の役割をどう考えているの。」

広島から戻ったある日、私は母に尋ねられた。私には今は未だ、自分が多文化の様々な考え方を理解している事で、具体的に何が出来るのかわからない。でも、いつか私は世界の人々に平和のメッセージを伝えたい。「手に武器を持つのではなく、手をつなごう」と。そして、皆に気付いてほしい。「戦いの向こう側で苦しんでいるのも、皆、人間なのだ」ということを。

ぼくたちがつくる未来

L工校　中等部　一年一組
豊田　夏希

ぼくたち人間は、毎日車や電車や飛行機などの交通手段を使って様々な場所へ行き、家ではテレビを見、コンピューターを駆使し、夜通し明かりをつけ、この上ない快適な暮らしをしている。今や、僕たちの生活は日々進化している。けれど、その陰で多くの環境破壊が引き起こされている事をどれだけの人が知っているだろうか。そしてその中のどれだけの人が、環境破壊について考えているのだろうか。

環境破壊は様々な形で引き起こされる。例えば、水質汚染。僕たちの生活排水、企業が海に流す工業排水、海難事故による海水の汚染は、世界中で深刻な問題だ。水質汚染により多くの生き物が死に、僕たちの飲み水にも影響が出ている。

次に土壌汚染。有害物質が工場や施設から

漏れたり、ゴミなどの埋め立てによって有害物質が土壌の中で発生する。記憶に新しい所では、福島の原子力発電所の崩壊により放射線物質が漏れ、多くの地域で土壌が汚染された。

そして大気汚染。工場や自動車などの排煙が主な原因だ。僕たちが車に乗れば乗るほど大気は汚染され地球温暖化に繋がる。北極の氷河が溶け始め環境に悪いメタンガスを発生している。そしてこれが異常気象に繋がる。気温を上げ降水量も大きく増える。二〇三〇年には、地球温暖化により世界中の環境が大きく変わっているだろう。

このように僕たちの生活は、環境破壊によって成り立っている。つまり僕たちが便利で暮らしやすい生活を送る事で、僕たちは住んでいる地球を傷つけているのだ。では、そんな僕たちがどうやって環境破壊を止めることができるのだろうか。世界レベルでは温暖化の速度を遅らせるために発電方法を水力、風

力、太陽光に変えていったり、電気自動車やハイブリッド車に乗る事で、排気ガスを減らす事ができる。またゴミのリサイクルもその一つだろう。

それでも、環境破壊を減らすために僕が一人でできる事は何だろう。僕にはそんな大きな事はできないけれど、自分の生活を見つめ直し、次の五つの事を行うことに決めた。

その一、暑い時は窓を開け風をいれる。風がない時は団扇で扇ぐ。それでもつらければ、扇風機を使い、最後の手段にエアコンをつける。また寒い時は、洋服を重ね着し体を温める。それでも寒い時は、部屋でできる簡単な運動をする。最後の最後にヒーターをつける。ここで大切なのは最初から電気やガスに頼らない事だ。

その二、電気をこまめに消す。自分の部屋を出る時は、必ず電気を消す。夜は、全部電気を消して寝る。電気の番人となって電気の無駄使いを減らす。

その三、環境に優しい石鹸やシャンプーを使う。買う時必ず容器を確認し、環境に優しいかを調べてから買う。環境に優しいということは、体にも優しいということだ。

その四、車に頼らず歩いたり、自転車に乗ったりする。これは環境に優しいだけではなく体にとっても良いことだ。またできるだけ自家用車に頼らず、公共の交通手段バスや電車などを使う。このことで地理感覚も身につく。

その五、いらない物は買わない。欲しい物があってもすぐに買わずに、少し待ってそれでも欲しいかを自分に問いかける。もしかすると、その時には他の物が欲しいかもしれない。そしてそれも本当に欲しい物かどうか考える時間を取るべきだ。こうする事で無駄な買い物が減り、お金の節約と共にゴミを減らすことができる。

こうして見ると簡単なようだが、簡単なことほど見過ごしやすい。けれども、一人一人

の小さな積み重ねが大きな力になる。何しろこの地球には、七十億人以上の人が生きている。その小さな努力が七十億倍になれば、地球の環境を変えていくことも不可能ではないと僕は信じる。僕たちの未来は僕たちの手にかかっている。一人一人が自分にできることを考え行動することが、未来を変える。そこに僕たちの未来がある。

三姉妹キャンドルの作り方

中等部一年一組　宮西あかね

さわやか、というには少し暑いような風の吹く、よく晴れた日曜日。「今日は外で汗を流したり、プールに行ったりするのにもってこいだ。」――そう思ってしまうような日に、私はなぜか家の中で一人黙々とロウソクを折っていた。

今日は妹たちと一緒にキャンドル作りをする予定だった。小四の妹、ひかりが、「宿題ではないけれど夏休みの自由研究みたいなことをしたい。」と言い出したのがきっかけだ。得意か不得意かは別として、「工作好き」というのは三姉妹の共通点だ。早速みんなでキャンドルを作ってみよう、ということになったのだ。

なぜ手作り＝（イコール）キャンドルなのか、不思議に思う人も多いだろう。とくにはっきりとした理由もないが、「いつかやってみ

たかった」というのが大きい。キャンドルを作る、というのは、特に小学生の女子などにとって、とても人気がある「自由研究」だ。簡単なのにかわいらしく、しかも使える。それに、「キャンドル」は英語で、「ロウソク」よりも何だか格好よく聞こえるのだ。いつしか、それは私とひかりの夢となっていったのかもしれない。そんなこんなで我々三姉妹は、（小一のくるみは自由研究が初めてだったので特に）楽しみにしていたのだ。

まずロウソクを早く溶かすために砕く。長さ三十センチほどのロウソクが、一人二本配られた。それを、芯を切ってしまわないように（後でそのまま芯として使うのだ）、そして下に敷いた新聞紙から落とさないように（母が何回も注意しに来た）、気をつけて割る。案の定、小一のくるみは五分も経つと飽きてきたようだ。

「ねえ。これってさ、ロウソク溶かして、色つけて、また固めるだけだよね。それじゃ、

キャンドルを作ってることになんないじゃん。」

生意気なことをしゃべり出した。キャンドルが小麦粉とバターと、そんな物できていると思っていたのだろうか。それとも、無の状態からキャンドルを出現させたいのだろうか。それなら、ハリーポッターに頼んだ方がよい。だいたい、あの話し方は私の真似だろうか？それとも、ひかりなのか？ふとひかりの方を見ると、新聞の四コママンガを読んでいる。言い出した張本人まで飽きたのか！

「トイレ行ってくる。」

「水飲みたい。」

そう言ったきり、二人とも返って来なかった。私は仕方なく、一人でこの単調な作業を続けることになった。やれやれ。

一人だけになった私はポキポキを終え、ロウを溶かす作業に入った。とうとう六年間の夢だったキャンドル作りのイメージ通りの作業だ。私は一人で興奮しながら、キッチンへ

向かった。
ロウを溶かし、クレヨンのかけらを入れて色をつけ、紙コップに入れ固める。三回繰り返して、私は緑、黄緑、黄色のグラデーションキャンドルを作った。額の汗をぬぐい、達成感に浸る。
「おー、できたの？」
「見せて、見せてえ。」
妹たちがやって来る。なかなか上手く出来たと思う。ロウが固まっていくうちに少しずつ色が変わっていったので、思ったよりも淡い色合いになったが、それはそれで素敵だ。ロウが溶けたらまた色が変わるのかな……と火を灯すのを思い浮かべるのも楽しい。
単純な感想だが、楽しかったのでまたやりたいと思う。そして、なぜだか分からないが、三色キャンドルは三人で作ったもののように感じられる。でも、まあ、妹たちにはしっかりと片付けに参加してもらった（というよりさせた）し、終わり良ければ全て良し、の一

日だった。



5Kマラソン

W校　四年　二組

武田　梨里

私は、何事にも集中出来ません。家で勉強していても二分たたないうちに席からはなれてしまって、つまらない事は続けられません。おまけに、私は体が小さいので、体育でヒーローになった事がありません。この事によって同級生の男子にバカにされています。姉には、「ちびもやし」というあだ名をつけられ、「そんなことだから、せっかくプールに遊びに行ってもすぐに青い顔をしてブルブルふるえだすのよ。」とばかにされます。日本でもリレー

16×16

選手になったことがありません。私も周りも私が足が早いと思った事は一度もなかったのです。

私の住んでいるイーストチェスターで五キロマラソンがありました。町のチャリティーイベントだからと言って母が勝手に私と姉をエントリーしました。私は、友達とお祭り気分を楽しみながらのんびり歩こうと思っていました。

しかし、一緒に参加を決めた友だちと練習を始めてみると、走ることがとても楽しいことに気が付きました。姉と友達は、すぐにおなかがいたい、暑いと言って歩いていたけれど、私は気分良く走り続けることが

出来ました。二人とはトラック二、三周の差がつきました。友達とおしゃべりしながら歩いていたらつまらない、本番は自分のペースで走ってみようと思いました。

前日の夕方、図書館にゼッケンとTシャツを取りに行きました。そのTシャツには、「イーストチェスタ－5K－」と書いてありました。明日これを着ると思うとワクワクして来ました。ゼッケンも、テレビで見た本物のように格好良か、たです。

当日、タウンホールに向かうと、たくさんの人が集まっていました。早そうな人や、アメリカンフットボールの選手のように体のがっシリし

ている人がたくさんいました。私は自分がとてもちいさいように思えました。

スタートの合図がなりました。みんながいっせいに走り始めました。間もなく、一緒に練習していた友達と姉は、はるか後ろに見えなくなりました。少し行くと、いつも私を見下ろしている同級生の男の子がいましたが、軽々とぬかしました。三キロくらい行くと、姉の友だちの中で一番足の早い子に追いつきました。ず。と一人で走っていたのでやっと友達と会えたのがうれしかったです。ゴール地点が見えて来たので、最後は全速力でかけ入みました。けいじ

板を見ると、三十一分三十二秒でした。私の事をいつもバカにしている二つ年上の姉は、私がついてから九分もたってからや。とゴールしました。

5Kマラソンに参加して、私は一つとく意な事が出来ました。新しい事にチャレンジしてみたら、自分でもおどろくような結果が見つかりました。

ずっと愛してるよ

L工校　三年一組
高橋　勇登

一年前の今日、九月三十日に、ぼくの家のねこがなくなりました。名前はレオンです。ぼくは、レオンが苦しんでいた事や悲しかった事を思い出しました。

去年の九月二十九日、ぼくは水泳教室に行きました。レオンは、ずっと体調が悪くて、ぐったりしていたので、ぼくはとても心配でした。

「レオン、大じょうぶかな。」

ぼくはお母さんに聞きました。

「レオンは『行ってもだいじょうぶ』と言ったよ。」

と、お母さんは答えました。ぼくは不安でいっぱいだったけれど、プールに着いて、水につかったら、ぼくのなやみは全部いっの間にかなくなりました。

翌日、ふつうに日はすぎようとしていました。お父さんは、いつもより少しおそく帰って来ました。レオンは、お父さんの帰りを待っていたかのように、午後八時十九分に死にました。ぼくはその時、シャワーをあびていました。お父さんがぼくの所に来ました。「おふろに長く入りすぎ。」と注意されるかもと、ぼくは思いました。お父さんは、ぼくにこう言いました。

「今、レオンが、死んだから。」

ぼくはそれを聞いたしゃん間、すぐシャワーの取っ手をグイッと止めて、素早く着がえました。リビングのぼくのつくえの横で、お母さんがゆかにすわって小さくなっていました。お母さんのうでの中に、タオルでまかれたレオンがいました。ぼくの心ぞうがドキンと動いたのがわかりました。「ドキン、ドキン、ドキン。」ものすごい音でした。心ぞうがびっくりして、心ぞうにあながあきそうでした。ぼくは、そうっとレオンをだきました。レオンの体はあたたかくたってす。でも、いつもとちがうのがわかりました。

16×16

「ぼくのせいだ。ぼくのせいだ。」

ぼくは自分におこりました。それは、その日の夕方、テーブルから落ちるレオンを助けられなかったからです。ぼくは、気持ちが整理できませんでした。悲しかったけれど、なみだが出ませんでした。なぜだかわからなくて、とてもショックでした。

あの日から一年がたちました。レオンの事を思い出すと、今はなみだがぽたぽた出ます。レオンは、やさしいねこでした。家族がびょう気の時は、いつもベッドのそばで見守ってくれました。ぼくは、もっとレオンの世話をしてあげればよかったなと、今も少し後かいしています。

今日、ぼくは写真の中のレオンに、こう語りかけました。

「レオン、八年間いっしょにいてくれてありがとう。天国でも楽しんでね。レオンといっぱい遊んだね。悪い事もしたけど、ごめんね。レオンの事を一生忘れないよ。レオン、ずっと愛してるよ。」

16×16

僕の「初土俵」

W校　三年三組
那須　藍貴

相撲って力強い。相撲は頑張る力のぶつかり合いだ。今年の夏、大相撲大ファンの僕は「あきらめないで頑張る」という相撲にとって大切な強さを、自ら体験して学んだ。

七月二十四日、日曜日。東京都大田区梅屋敷公園で「藍貴山」こと僕、那須藍貴が「初土俵」をふんだ。生まれて初めて白いまわしをしめてもらっている間、僕は大相撲力士になったような気がして、わくわくした。僕には、まわしが思ったよりもずっと重かった。

けい古は、まず十一人全員で円になり、ゆっくり百回四股をふむことから始まった。僕はすごく脚が重く感じて足の裏も痛くなった。その後、すり足、つっぱり、まわしを取るけい古をしてから、ちびっこと三年生以上チームに分かれて、それぞれ相撲を取った。僕は初げい古で体も小さいので、ちびっこチームに入った。最初の対戦相手は、やる気満々の小さな一年生。僕は前から相撲の作戦をノートに書いておいたが、取組中は全く何も考えられなかった。立ち合いは思ったよりも相手が強く当たってきた。僕も必死でせめようとしたが、相手の押しは強く、僕は力が

16×16

出せずに寄り切られてしまった。僕は悔しかったが「次も頑張るぞ」と決めた。取組は勝ち残り戦で、二戦目の相手は、またあのやる気満々の一年生だった。僕は、両上手を取って投げを打ち、初白星をあげた。僕は前の負けを引きずらないで勝つことが出来て、気持ちがすっきりした。僕は勝ち残りで、その後、吊り出し、寄り切り、吊り倒し、上手投げなどで連勝した。僕は思ったよりも相撲がうまく取れてびっくりした。負けた時、膝やお尻がすりむけてヒリヒリ痛かったが、僕は取組にすごく集中していたので、気にならなかった。ちびっこチームでの成績が良かっ

たので、小兵力士の僕は、ついに倍以上重い巨漢力士の三年生と対戦することになった。「大きいな。吊り出されちゃうかも。」と僕は少し不安になった。相手はいつもそこで相撲を取っているので、明らかに僕よりも応援が多かった。予想通り相手は重くて、僕が押してもあまり動かなかった。僕は必死にまわしを取って押そうとしたが、体を入れかえられて、押し倒されてしまった。僕は負けて、がっかりした。でも、先生達にもう一度同じ相手と対戦したいかと聞かれて、僕は「今度は勝つぞ。」と強い気持ちで受け入れた。二回目は僕はこわがらずに取組にのぞんだ。

16×16

僕は今回はあまり押さず、まず上手を取りに行った。僕の方が腰が低く、相手は外四つを取ろうとしか出来なかった。しばらく両者動かなかったが、僕は良い体勢だったので、自らせめることにした。まず、僕は投げを打ってみた。決まらなかったが、僕は少し体を入れかえることが出来た。そして、僕は足をひっかけながら、一気に寄り切った。「あきらめないで、また対戦することにして良かった。」と僕は本当にうれしかった。

今年の夏の相撲体験は、僕に「あきらめなければ、いつか良い結果が出る。」と教えてくれた。相撲はきびしい。でも、僕は相撲が大好きだ。

16×16

朝めし前

L校　二年二組
クラーク将人

朝めし前、ということを知っていますか。めしとはごはんのことです。だから、朝めしとは朝ごはんのことです。朝めし前とは、いそがしい朝ごはんの前にでもできるぐらい、かんたんなこと、と言うことです。ぼくは七時十五分に

おきて、八時二十五分のバスにのります。ぼくは朝ごはんの前かバスにのる前に、していることがあります。

げん地校二年生になってからベッドメイクをするようになりました。ベッドメイク、とはどう言うことかと言うと、朝おきてぐちゃぐちゃになったふとんをそろえることです。さいしょは、シーツをなおすのにす

ごい時間がかかりました。
そして、きちんとなおすことができませんでした。けれど、一年たった今は、とてもかんたんです。朝おきてトイレに行く前に、だれにも言われなくてもできます。三年生になった今は、ベッドメイクだけではなくておそうじもしています。
ワイプでテーブルやドアノブをきれいにします。まど

ふきをすることもあります

ワイプがまし、きたなくなれればいいのです。ピアノのけんばんもふくことがあります。ベッドメイクは、朝めし前になったら、朝めし前になると思います。

そうじは一年間がんばってしたら、朝めし前になると思います。

朝めし前のベッドメイクやふきそうじをするとどんないいことがあるかと言う

と、学校から帰ってくると
きれいなテーブルがまって
いるのです。夜はきれいな
ベッドにねられます。おそ
うじは、家ぞくのためのお
手つだいです。らい年はも
う一つできるようになって
いると思います。

かわいいラテ

W校　二年一組

米ざわたまき

わたしのペットの犬の名前は、ラテです。お姉ちゃんとわたしがアメリカに来たくなかった時、お父さんが「もしアメリカに来たらすてきな犬をかっていいよ」と言ってくれたので、犬をかうことになりました。ラテは、ペンシルバニアのすごく広

いのう場で買いました。

　ラテはまっ白で、耳が茶色で、目がくりくりしています。朝、ペロペロなめてわたしを起こします。その時わたしは「かわいいからまだ起きたくないな。」と思います。わたしが学校に行く時は、いつまでもわたしにくっついています。

　さいしょげん地校のえい語がぜんぜん分からなくて、

早く帰ってラテに会いたいなと、学校で考えていました。帰って来ると、ラテはげんかんでおむかえをしてくれました。その時わたしははうれしくて、「ありがとう」と思いました。今ではわたしが友だちをつれて帰るとすごくよろこびます。ごはんの時、わたしのいすの下に丸まって、モップみたいになるのもかわいいです。

　でも、ラテにはこまったところもあります。一つは、さん歩の時にほかの犬に、「ワンワン」とほえることです。わたしたちはその犬のかいぬしさんに「ソーリー」と言わなければなりません。もう一つは、ラテにおるす番をさせて出かけると、えんぴつやぬいぐるみをこわしたりわるさをします。この間、家ぞくで、ア

ツプルピッキンガに行って
帰ると、わたしのお気に入
りのサンダルをかみちぎっ
ていました。その時わたし
は「もうラテをゆるさない
と思いました。でも、わた
しがなくと、すぐにとんで
来てなみだをなめてくれま
す。やっぱりかわいいです。
いつかラテを日本につれて
帰ります。いつまでもラテ
といっしょにいたいです。

ぼくのひまわり

L工校　二年一組
畑ざき　ゆうた

いつもぼくが行く公園には、夏になると、せい高のっぽのひまわりの花がたくさんさきます。そのひまわりの花を、ぼくの家のうらにわにさかせたくて、きょ年の秋にたねを二十こって家にもって帰りました。

今年の春、おかあさんと、

ひまわりのたねをプランター
に「こうえんました。「早くめ
を出せ。」と、わくわくして
まちました。
一週間たったころ、にわ
にいたおかあさんが、
「あらあら、ひまわりのた
ね、りすがほってもっていっ
ちゃったわ。」
と言いました。あわててにわに出たら、二十このほとんどを、りすがもっていっ

てしまった。てました。一つだけのこっていたたねは、ぐんぐん大きくなり、公園のひまわりのように、せい高のっぽになりました。

少したって、そのひまわりは、大きなつぼみを一つつけました。黄色の大きな花がさくのがとてもたのしみでした。

「あらら。」

またおかあさんがにわでさ

けびました。にわに出たら、頭のないひまわりが目にたずらをして、ひまわりのつぼみをもらっていってしまったのです。ぼくはくやしくてたまりませんでした。

頭のないひまわりは、せ（）だけぐんぐんのびていきました。

「あらら。」

またおかあさんです。今ど

はうれしいニュースです。
ひまわりに小さなつぼみが
二つついてりたのです。せ
いが高くなったので、もう
りすにもとられません。
きれいな黄色い花がさき
、ぼくはうれしくてジャン
プしました。にわをうろう
ろするりすに、
「きみのまけ！。」
と言ました。

ねがいごと

L I 校1年2組

阿多　えれな

わたしは、9月からPS1年9組にかよいはじめました。はじめての学校は、びっくりすることもあったけれどまい日なにがあるかたのしみでわくわくしました。

ただ一つここまっていたことは、えいごがすこししかわからなかったことでした。

じゅぎょうがあまりわからないのであきることもありましたね。そこでわたしは「ともだちをつくりたい。」ねがいごとをかきました。もっとたのしくできるようになりたい。いつかパパよりもだれよりもえいごが上手になりたい。まい日あきらめないでがんばりたいレ。

そしてねがいごとをかなえられるようにゆうきをだ

してじぶんからはなしかけましたそうしたらなかまにいれてくれました。

ところがじけんがおきました。それは、ちょっかいをだしてくることでした。

わたしはおぼえたえいごで「いやだ」。

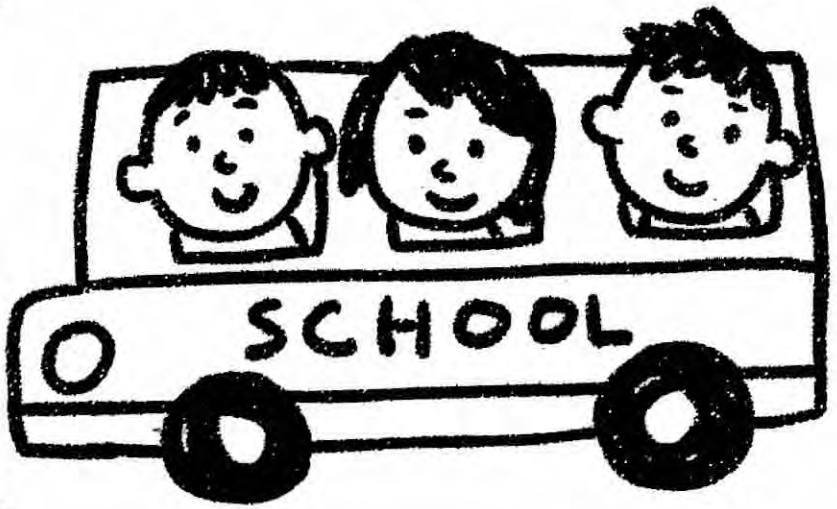
といいました。こまっているわたしを見て先生が、「みんなともだちだよ。なかよくしようね」。

といってくれました。わたしは、あんしんしました。

いまでは、みんなともだちです。うれしくてどんどんたのしくなりました。

そして、さんすうのじゅぎょうではがんばって手をあげています。

わたしは、もっともっとと学校がたのしくなるようにこれからもまい日がんばることをつづけていきたいです。



12×12